

Title	ユージン・グッドハート著 『文化とラディカルな良心』
Sub Title	Eugene Goodheart, Culture and the Radical Conscience
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology ). Vol.47, No.5 (1974. 5) ,p.97- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19740515-0097">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19740515-0097</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 紹介と批評

Eugene Goodheart,

### Culture and the Radical Conscience

Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1973, 179 pp.

ユージン・グッドハート著

### 『文化とラディカルな良心』

「離反の感情は、アメリカにおけるひとつの特徴的な文化的態度である、アンティ・インテレクチュアリズムの最近の顕在化にすぎない。通常その源泉は右翼に発したものののだが。もしも《ラディカルな良心》が文化的な諸問題に蔓延しなかつたならば、その対抗者たちも蔓延しなかつたことであろう。対抗文化なるものは別途の文化を実現しそなつた……」と序文に書かれているように、本書の標題は、内容的にはいわば括弧つきの逆説的表現であることに注意しなくてはならない。《文化》といつても《高度文化》と《対抗文化》とが、《良心》といつても、まさに良心なるがゆえの《倍愾》とがパラレルな位相として対置されているからである。

紹介と批評

本書は、それぞれ独立したテーマを取り扱ったつぎの論文から成っている。

- (1) 文化の有意義性と権威
- (2) アメリカおよびイギリスの文化的ラディカリズム
- (3) 人文科学とパーソナルな知識
- (4) 文学研究とラディカリズム
- (5) 高度文化とテモクラシー
- (6) ユートピアと歴史のアイロニー
- (7) 想像と政治への誘惑
- (8) イデオロギーと高踏的態度

これらは、全体として著者の論理展開が深まるとともに、彼自身の批判の精神が開花してゆき、多様なラディカリズムの枯れ凋むプロセスが俯瞰できるように配列されているが、ここでは(6)と(7)を本書の中心的課題として採りあげ、他の論文については簡単に触れるにとどめておく。

(1)と(2)は、ヨーロッパにおいて何度となく問われてきた伝統的文化の有意義性の問題状況を具体的に例示し、さらにイギリスにおけるR・ウィリアムズとかR・ホガードの社会批判の在り方と比較対照することによつて、アメリカの《対抗文化》の知的貧困さを証明する。シオドア・ローザックの『対抗文化の思想』(稲見秀勝・風間慎三郎訳・ダイヤモンド社 現代叢書)に典型的に示される「俗物性の

怨恨」が、その批判の対象とされている。(3)と(4)は、グッドハート自身の専門領域である文芸批評に関するもので、対抗文化の場合にみられると同様に、アカデミズムにおける俗物主義——批評の客観性、科学的方法を標榜するニュー・クリティシズム——が手厳しく批判される。翻つて、批評の《非政治化》をブルジョワ的であると攻撃するマルクス主義的文芸批評（スタンフォード大学のブルース・フランクリン教授らの立場）の政治的偏向と卑俗化に対しても、反批判が加えられている。(5)は、しばしば論じられてきたデモクラシーと文化との対立関係を、緊張関係として捉えかえして、むしろ高度文化に敵意を抱く対抗文化の擁護者たちのうちに瞥見される反俗的な傾向に疑義を呈している。

(6)と(7)において、現代ラディカリズムの政治的、否、反政治的とも言うべきユートピア主義の性格が明確化されているが、筆者のいささか煩瑣な引用を除けば、その論理は明晰である。《歴史のアイロニー》とは、マルクスの『ルウィ・ボナパルトのブリュメール十八日』の冒頭に述べられているような歴史における自己欺瞞のことだが、さらにそれは、歴史的行為者——彼は一種の思想の依憑者である——が歴史過程のなかで、みずから予期せざる目的を遂行してしまう、まさにアイロニーをも指示している。それは「歴史過程を予想することの人間の無能力さ」の帰結にはかならない。マルクス（およびエンゲルス）は、十八世紀啓蒙主義のいわゆる理性のユートピア主義に真向から反対し、その限りにおいてのみ、反ユートピア的批判の伝統を、保守主義者エドモンド・バークと共有している

る。彼らはともに、ユートピアの思想が無媒介的に歴史の領域に入り込むときに、問題となり、実際に有害とさえなることを熟知していたからである。

ところで、近代の反ユートピア主義についてはどうであろうか。フローベルの『感情教育』、ドストエフスキの『地下生活者の手記』、ザミアチンの『われら』、オウエルの『一九八四年』など、グッドハートが豊富に引用しているところから示唆されるように、要するにそれは、「思想の暴虐」ということに對する鋭い知覚なのである。「ユートピア思想は解放への衝動を、人間の個人的・社会的実現への衝動を、あらわしている。しかしながら、それが歴史過程に組み込まれるとき、それ自身の強制、あるいは暴虐を行使しはじめ。」「思想の暴虐とは、ただ力を行使して脅す、明白な悪と認めうるような何もものかの暴虐ではない。それは、人びとの最高の理想、正義、自己実現、共同体的調和の表現であるがゆえに、誘惑的な暴虐なのである。これらの理想に対し特殊な正当化を要求して、ユートピアなるものは、その体制……のもとで依然として不思議にも不幸な状態にある人びとから、もう一つのヴィジョンを、したがって当のユートピアに反対して否と言う能力を奪つてしまう。」

二十世紀においては、種々の哲学によつて措定された歴史の《了解可能なプロット》への信仰自体は崩壊したものの、現代のユートピア主義は、既成の歴史的イデオロギーによつてもはや決定されていない未来に對して、革命的意志を任意に賦課しようとする。しかも注目すべきことは、この新しいユートピア主義が、反ユートピア

主義の摘発する諸特性との親近性を顕著に示している。グッドハートは、マルクーゼの『エロスの文明』に言及しながら「マルクーゼの直接的な靈感は、勿論フロイトあるいは彼のフロイト解釈である。解放は、理性の暴虐に対する抑圧された情念の反抗によつてはじめて到達される。哲学的基礎はさまざまに異なるけれども、新しいユートピア主義は、マルクーゼ、ノーマン・O・ブラウン、R・D・レインにその提唱者を有している。そこにはシュールレアリスムの初期の見解が見出されるし、さらに十九世紀ロマン主義にまで遡ることもできる。……われわれの最近の対抗文化は、新しいユートピア主義によつてまさに適切に定義されるのである。それはあたかもユートピア的な議論が、世界を変革するユートピア的企図を放棄するのを拒む人びとによつて撰取されたかのようなものである」。

理性のユートピアの支配の論理、それに反抗する新しいユートピア主義者たちの情欲をそそるものは、芸術的想像である。グッドハートは先ず、シラーの『人間の美的教育について』のもつ政治的の興味性、その現代的状況に照応する含意を説明する。シラーの場合、芸術が政治の世界を救済するという野望は、彼の保守主義的感情がこれを抑制していた。芸術的想像を政治運動へと行動化させたのはシュールレアリストたちであつた。詩の革命的实践を主張したアン・ドレ・ブレントンの政治的表現は、完全なるアナキーであつた。しかもそれは、たんなる比喩どころではなく、生々暴力であつて、街頭へ出て群衆にピストルを発射する直接的行為が賞讃されたのだ。それはリビドー的エゴイズム以外の何ものでもない。シュールレア

リストたちはボルシェヴィスムに寄り添つたが、ブルトン自身のパーソナルな役割はともかくとして、それが革命であるというだけの理由からであつた。

シュールレアリスムの美学的政治は死滅したが、その深い文化的衝迫は生き続けている。「ブラウンとマルクーゼ、読者と筆者、われわれの大半、そしておそらくはわれわれのだけれども、いまやなんとしても、年を経た堅固な慥慥で取り囲まれた、われわれの存在の疎外された状態から抜け出す道を、掘さくし始めなければならない——解放のこちら側、暗黒の此岸にいる限り、あえて現実なるものの範囲を明示するような真似が、どうしてわれわれにできるのか」。これは、ローザックがレインの言葉を引用して、「解放の弁証法」なる一節を結んでいる言葉である（前掲書二五三頁）。グッドハートの指摘するとおり、「想像が政治を救済するかどうか、という問いに否と言う理由は、そのような思想が不可能であるとか妄想であるとかいうにとどまらない。その政治的含意、その可能性を考慮すると、われわれはその有害さに気づくからである」。確かに、芸術的想像が、政治的文脈において暴虐的とならないことを、何もかも保証できないであらう。

本書の著者は、想像のもつとも暴虐的な顕現として、「ファシズムの美学」であつたマリネットの『未来派宣言』を例証としてあげているが、右の対抗文化の思想家たちの思考スタイルの傾斜や射程のうちに、ファシズム化への誘惑がまつたく無いとは言えない。「わたくしは、ファシズムが想像の崇拜の実践的帰結だ」と示唆し

ているのではない。わたくしが言っているのは、想像の崇拜が、その主要な顕現のひとつにおいて、ファシズムのための美学的正当化となることである。わたくしはまた、想像は常に本来的に世界を破壊し、あるいは作り直そうとする野心を抱いている、と示唆しているわけではない。想像はみずからとにも憩い、それ自体の創作の芸術的対象に歓喜する術を心得てきた。しかし、芸術作品を創作するという行為のなかで否認されたとみずから体験する想像——そして、攻撃的かつエロスのエネルギーを満足させる機会をより大きな世界のなかに発見する想像というものがある。この種の想像が政治の世界によつて誘惑されるのである」。かくて、「想像と政治への誘惑」なる論文は、「わたくしの批判は、ネメシスのように理性や想像のヒュプリスに対して向けられているのであつて、理性や想像そのものに對してではない」と結ばれているが、著者の批判的態度をよく窺い知ることができる。

最後の「イデオロギーと高踏的態度」は、政治的コミットメントを排斥し、できる限り思想の独立性に固執しようとするマイケル・ポラニイのような立場の脆弱性を批判すると同時に、最近の自由大学論争にみられたイデオロギー的偏向に強く反対する論文である。

政治行動主義、社会奉仕、新しい共同体意識の創造、いずれの利害のためであれ、新しい戦闘精神は、全般的に言つて、自己主張によつて大学を政治化する、あるいはむしろ再政治化するためのものである。グッドハートは、大学がまったく政治的無関心であつたり、いたずらに高踏的態度をとることを懲漚しているのではけつし

て無い。「わけでも、大学の反動的で批判的な性格が保持され、発展されることが可能であるためにこそ、要求されていることは、政治活動とか社会奉仕の抑圧ではなく、多様な政治的衝動を生かし続けてゆくことである」という言葉が、著者の透徹した良心をわれわれに告げているであらう。ともあれ、右翼にせよ左翼にせよ、再構成されたディオニュソスの自我（トラウン）は、それがいかなる情熱と飛翔のめくるめく弁証法を展開してみせようとも、社会全体にとつての政治的教知を提供するものではないことを銘記しなければならぬ。